



知多アグリ
愛知県阿久比町

杉浦康治
さん

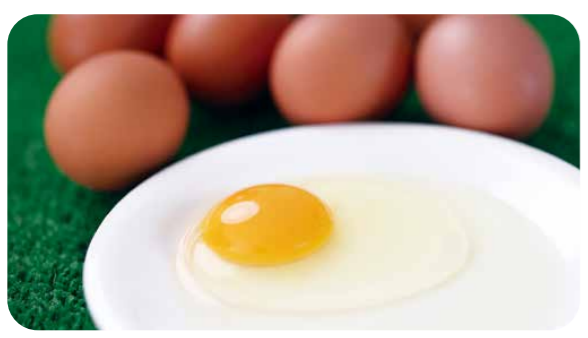
一生懸命



養鶏と米の2本柱の経営

地域になくてはならない農業を実践

愛知県阿久比町の株式会社知多アグリ(杉浦ファーム)は、採卵鶏と米の二本柱の経営に取り組む。
大切にしているのが、地域に根差した経営。地域の農家と協力し、餌や鶏ふんの地域循環を実践する他、
地元小学生の農業体験の受け入れを20年以上続けている。卵の自動販売機も人気を集めるなど、
地域になくてはならない存在として活躍している。



取材は飼養衛生管理基準を順守し、家畜防疫に配慮して行いました。
鶏舎内等、一部の写真は農場の資料提供の下、掲載しております。



目を引く外観の「杉浦ファーム自動販売機」

店内にずらりと並んだ
卵の自動販売機



お手頃な価格で人気のファミリーパック



レンゲをすき込んで栽培した「阿久比れんげちゃん」[®]と自慢の卵

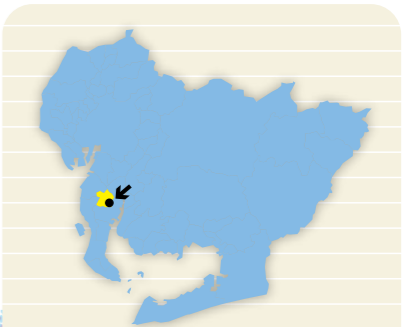
鶏も人間もきれいで快適が一番 防疫対策や鶏舎の清掃を徹底

杉浦康治さん[®]と妻のあゆ美さん



株式会社 知多アグリ
代表:杉浦康治さん
住所:愛知県知多郡阿久比町横松字中側43
飼養羽数:採卵鶏19万3,000羽、
ひな3万8,000羽
作業従事者:本人と妻のあゆ美さん含め18人
鶏舎の数:育成舎2棟、採卵鶏舎9棟

オンラインショッピングは
こちら▶▶▶



知多アグリに従業員の皆さん



入り口には消毒ゲートを設置

父、祖父の死を乗り越え 法人化や米作りを軌道に

幹線道路を外れ、少し進むと農場の入り口に設置された消毒ゲートが見えてきた。車両の消毒後、車を降りて消石灰がまかれた道を抜けると、社長の杉浦康治さん（38）が出迎えてくれた。事務所や集卵舎内はきれいに整頓され、清潔感があふれる。JAあいち経済連畜産課の宮下直樹さんとJAあいち知多畜産センターの和田晃範さんは、口をそろえ「基本的な防疫対策が徹底され、非常に清潔な鶏舎が維持されている」と話す。

目立つところの清掃は毎日、エアブロワーでの鶏舎清掃も月に2回は行うという。鶏舎は、クーリングパッドを取り入れた冷却や屋根に遮熱塗料を塗る

知多アグリは、1950年ごろに杉浦さんの祖父が農業を始めたことが始まり。元々は、米と野菜を中心に経営していた。その後、杉浦さんの父親が養鶏を始め、低床鶏舎を建設。養鶏と米を中心とした経営に切り替えていった。

杉浦さんは3代目。「元々は就農しよ

うとは思っていなかった。だが、農業大学校で農業経営を学ぶうち、「意外とできるかも」と思ったという。学生時代はサッカーやボクシングなどスポーツに打ち込み、体力にも自信があった。農業大学校を卒業後、県内の農場での研修を経て2006年に就農した。

就農後は、養鶏をメインに担当し、順調に技術を磨いてきた。しかし、就農して10年が経った16年、育すう舎の建設や法人化の話が進む中、父親と祖父が他界。「法人化の話も進めないといけないし、米作りは素人同然。当時は大変だった」と振り返る。その時に杉浦さんを支えたのが地元の農家やJA。杉浦さんに親身に寄り添い、米作りや法人化などをサポートした。杉浦さんは「声をかけてもらい、本当にありがたかった」と感謝する。

妻のあゆ美さんは「結婚当初から、常に仕事のことを考えていて、そのため努力は惜しまない人です」と話す。

目立つ外観の自動販売機が人気
こだわり卵と米が店内にずらり

現在、ウィンドウレス鶏舎で、赤玉の「ボリスブラウン」「シェーバープラウン」、白玉の「ジュリア」「ジュリアライト」を飼育。年間約3500tの卵を出荷する。

知多アグリは、甘味とこくがあり、黄身が濃い。配合飼料は、JA東日本くみあい飼料の「東海きらめき14 NEO」などを使い、餌には飼料用米（もみ米と玄米）を混ぜる。海藻やヨモギなども与え、こだわりの味を実現している。

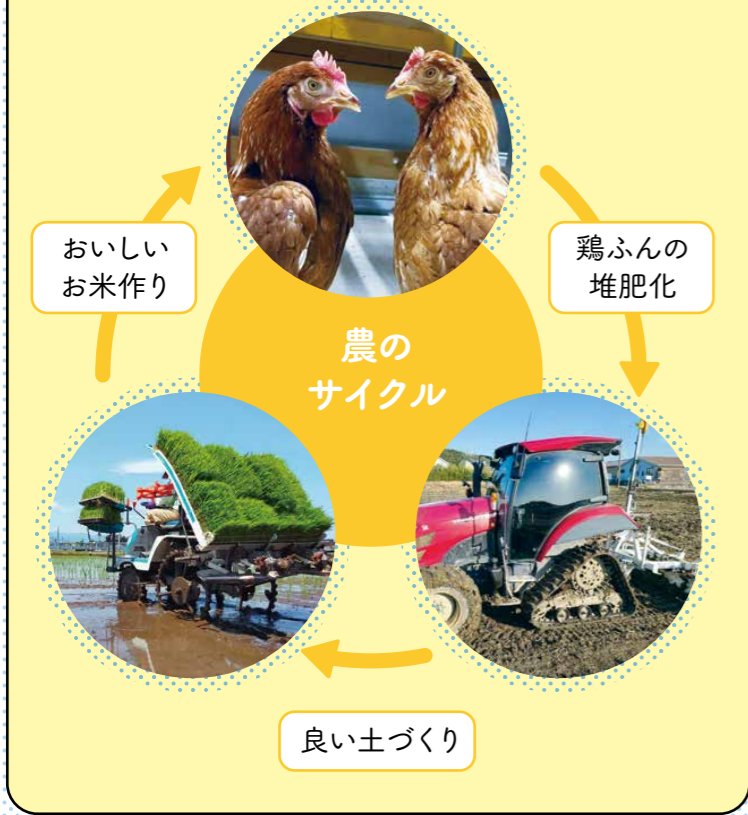
また、あいち経済連とも協力し、定期的にサルモネラ検査を実施。おいしく、安全・安心な卵の出荷を心がけている。

この卵を求める人で人気を集めるのが、町内に設置された「杉浦ファーム自動販売機」だ。

21年にリニューアルし、台数を増やした。コンテナハウスの建物の側面には、「農場直送」の文言と共に卵と米の写真がどんとデザインされ、遠くからでも目立つ外観だ。

店内に入ると、ずらりと自慢の卵や米が陳列された自動販売機が並ぶ。価格は商品内容によってさまざまだが、お得なファミリーパック（卵の詰め合わせ）の価格は、1・2kg×2パックで800円。「気軽に食べてほしい」と

知多アグリ循環型農業の流れ



青々とした知多アグリ
の田んぼとレンゲの花
(右下)



左からJAあいち知多・和田さん、杉浦さん、JAあいち経済連・
宮下さん、JA東日本くみあい飼料・田口稜さん



飼料用米などを混ぜた餌



清潔に保たれた鶏舎

集卵室の様子



今、杉浦さんが力を入れているのが、循環型農業の実践だ。養鶏で出た鶏ふんを堆肥化し、自社や近隣農家へ供給することで農地に還元。鶏ふんを使って栽培した飼料用米などを餌にして循

近隣農家と循環型農業に挑戦
自給飼料の拡大目指す

場の作業だけでなく、獣医を招いた衛生管理の検討会などにも参加してもらい、養鶏を取り巻く関係者の声も届け、養鶏の難しさを知ってもらう。一方で、必ず「農業はやってみると面白いよ」と伝え、ポジティブな印象を持ってもらうことは忘れない。実習が縁で、JAや知多アグリに入社した人もいるという。「お世話になった農業大学校や地元

農業体験の受け入れを20年以上
農業の楽しさ、大切さを紹介

「地域の協力や理解がないと、農業特に畜産は成り立たない」と話し、地域に根差した経営を大切にしている杉浦さん。名古屋市の通勤圏に位置する同町では、農場周辺にも住宅が多い。地域住民との関係づくりが重要だ。知多アグリでは、近隣の小学生の農業体験の受け入れを20年以上前に始めた。父親の代から始め、今は杉浦さん

の思いから、お手頃な価格で販売し、消費者の心をつかんでいる。自家生産の米も販売しており、中には卵とお米をセットで買っていく人も。「よく買いに来ますよ」と話し、取材中も、続々と卵を求める人が訪れていた。米は、主食用米25ha、飼料用米12haで栽培。主食用米は、化学肥料を使わず減農薬で栽培し、景観作物のレンゲを緑肥としてすき込んで栽培。地元の農家有志でつくる「阿久比米れんげちゃん」のブランドで販売している。春には田んぼにレンゲの花が咲き、地域の人々を楽しませる。

環させる。杉浦さんは「地域循環のストーリー」性が面白く、近隣農家と協力すれば、輸送費も抑えられる」と意義を話す。現在、鶏ふん堆肥は年間2000t生産し、5%ほどを自社で活用している。耕種農家がいやすいよう、粒にして製造している。餌として与える飼料用米は、自家産の他、近隣を中心に県内産が中心だ。知り合いの農家とも協力し、WCS(発酵粗飼料)の生産にも乗り出している。今後の目標について、「10年後、20年後を見据え、地域とも協力し、少しずつでも自給飼料を増やし、堆肥の有効活用を進めたい。近年大発生している鳥インフルエンザについても、行政やJA関係者と連携しながら、業界を守るために防疫対策に取り組んでいきたい」と力強く語る杉浦さん。祖父や父の思いを継ぎ、挑戦を続ける。



循環型農業を進めたいと話す杉浦さん

が遺志を継ぎ、続けている。年3回程度、毎回150人ほどの児童を受け入れる。農場の見学や田植え、稲刈りなどを体験してもらう。児童や先生からは好評で、大人になっても卵や米を買いに来る人もいます。中には、農業体験に参加した子どもから話を聞いて、卵を買いに来るようになった親も。杉浦さんは「体験を通して地元の農業や養鶏のことを知ってもらい、理解につながればうれしい」と話す。知多アグリでは、農業大学校の実習生の受け入れも行う。これまでに10人を受け入れ、受け入れ期間の40日間で養鶏を中心に学んでもらっている。現



児童に好評の
農業体験